
Bloom All Over

ハッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bloom All Over

【Nコード】

N1770D

【作者名】

ハッシー

【あらすじ】

北出誠、高校一年、当小説の主人公の学園生活が遂に幕を上げる

！！

第一話：始まった高校生活

僕の名前は北出誠。

この春から高校生。

中学時代はパシリとか色々やらされてきたけど、高校では生まれ変わってやる！って思ってたんだ。

ちなみに入学した高校は男子校の乱舞高校だ。

偏差値はあんまり高くないけど大きな時計塔があるからここに決めたんだ！

あゝあ、明日が楽しみだなあ。

入学初日教室にて

誠二は1年1組だ

机に座る誠

「ゴクリ」

なんでこんなにガラ悪そうな人だらけなのぉ！

誠から見ると四方八方で、タバコを吸うもの、酒を飲むもの、ピアスを無数に付けているもの、e t c . . .

誠は一人ビクビクしていると、何者かが肩に手を乗せてきた。

「ねえ君、喉渴いたから飲み物買ってきてくれないかなあ？」

その男は大柄で金髪の『悪』の象徴的な顔をしていた。

誠はビクビクしたが、中学までの自分を捨てるために勇気を出して反抗した。

「き君 自分の欲しいものくらい自分で買いに行きなよ。」

するとその男は突然片手で誠の胸ぐらを掴んだ。

「へえ、お前俺様に齒向かうんだ。素直に買ってくれば済むものを。」

男はもう一方の手で誠の顔を殴ろうとした。

駄目だ、やられる！

そう思い誠が目をつぶった。

しかしパンチはいつこうに来ない。

恐る恐る片目を開けてみると、そこには男の拳を片手で掴む者がいた。

「な、なんだおま」

男が言葉を言い終わる前に、その人は続けて顔面を勢いよく殴った。

「目障りなんだよ、デブが！」

男はそのパンチで気を失った。

こうして誠はようやく解放された。

「あの　ありがとうございます。」

「俺はお前を助けたわけじゃねえ、気に食わねえやつがいたから殴っただけだ。」

誠は内心恐いと思ったが、勇気を出して言った。

「あのお、名前は　」

「帰る！」

「へっ？」

「こんな学校にいてもなんも得るもんわねえよ。」

鞆を持ちとつとと教室を出ていった。

そしてその時誠は確かに鞆に名前が書いてあるのを見た。

「結城雅　　かあ、仲良くなりたいなあ　　」

こつじと誠の高校生活は幕を開けた。

第二話・HR委員（前書き）

新しいクラスという事で、HR委員を決めようとするが……

第二話：HR委員

「今日はHR委員を決めたいと思う、誰か立候補する人？」

担任の水野が言うが誰も先生の話を聞かず、ケータイやゲーム、タバコを吸うものもいる。

「おい、誰かやりたいやつはいないのか？」

「うるせえなハゲ、黙れ！」

「ソーだソーだ！」

一人の生徒に続きみんなからのブーイングだ。

正直誠は中学までのキャラを変えるためにHR委員になろうと思っていたが、このムードの中ではとてもじゃないけど手を挙げる勇気は出なかった。

「俺の　いくじなし　。」

「おい水野、俺がやるぜ！」

突如後ろの方から聞こえてきた声。

誠が振り返ると、そこには手を挙げる雅の姿があった。

「おい、結城、担任を呼び捨てで　」

「んで、俺でいいの？HR委員は。」

「うーん、まあ他に立候補するヤツはいないからな」

「俺がやる！」

またしても後ろの方から声が聞こえた。

手を挙げたのは、なんと昨日雅に気絶させられた大男、その名も小杉だ。

こんなところで結城にいい気させてられっかよ！

HR委員になって、このクラスの政権握ってやる！

「昨日気絶したやつだぜ」

あちこちからこの言葉が飛び交う。

「ふっ今は笑うがいい、だが最後に笑うのはこの俺だ！」

「まあ二人立候補者いるし、多数決するか。」

「ちょっと待て水野！」

「小杉、お前も呼び捨てに」

「HR委員を決めるのに俺が最も相応しい方法を考えた。その方法は殴り合いだ！」

これを聞いたクラスメートは、一斉に盛り上がった。

「よしっ、やれやれ〜!」

ヤジが飛ぶ。

「待て、殴り合いなんてやっていいと思ってるのか!」

「水野、大丈夫だよ、俺がすぐケリつけてやるからよ。」

「結城、そっいつ問題じゃ」

しかし水野の抵抗も空しく、HR委員争奪戦は開始するのであった。

第三話・結城VS小杉（前書き）

二人はHR委員の座をかけてまっとうに戦おうとする、果たして!!

第三話：結城VS小杉

「おい、かかってこいよ」

雅が挑発する。

「先攻はお前に譲るぜ。」
小杉も冷静に対応。

「じゃあお言葉に甘えてっと。」

そういうと雅は右手のシャツの袖を捲し上げ、小杉に突っ込んだ。

小杉もそれに応じて構える。

そして雅が拳を放ち、それは小杉の顔面に入った。

しかしそれと同時に小杉もカウンターで雅の顔に一撃入れた。

しかし二人は吹き飛ばされる事なく、再び戦いは続く。

「す　すごい」

誠は思わずこう言った。

しかしこの試合も長くは続かなかった。

「小杉、お前はカウンターが得意みたいだな。」

「へっ、どうだかな。」

「まあいい、ならこれはどうだ!」

雅がその言葉を言った瞬間、小杉が倒れた。

クラス中にざわめきが起こる。

「えっ、何が起きたの?」

この戦いを見た誠は何か熱いものを感じた。

そして

「結城君、えっと　その　僕　いや、俺と友達になってくれな
い?」

その瞬間今までのクラス中のざわめきがピタッと止んだ。

雅は怖い形相で誠の方へと歩いて行く。

誠はこの時やられる!と思い、目をつぶった。

しかし

「おい、北出つつたか?お前昨日もそうだけどスグに目ツブンの
やめた方がいいよ、それじゃ見えるもんも見えねえ。」

誠は顔をポカーンとした。

さらに雅が続ける。

「よし、友達になる変わりに、俺が今日からお前にケンカの極意を教えてやる。あと俺の事は雅と呼べ、名字だと気が狂う。」

「ああうん　ってケンカの極意教えるって!？」

「じゃあそういうことだから今日の放課後グラウンド前にいろよ!」

そう言って雅はまた教室を出ていった。

「こ、こら結城、またんか」

水野（先生）もそれを追いかけて、教室を出ていった。

第四話：秘密の特訓（前書き）

誠は放課後に雅に呼び出されて秘密の特訓を行うことになるが・・・

第四話：秘密の特訓

放課後

誠は雅の言う通りに、グラウンド前にいた。

しかしまだ雅の姿は見えなかった。

「まだ雅来てないなあ　しかし特訓ってなんだろう　まさか殴り合いをし続けるとか　」

誠は身震いした。

「悪いマコっちゃん！こいつの準備に手間とってた。」

そう言って雅はサンドバックを指差した。

「マコっちゃんって　てかサンドバック使って何するの!?!」

「いや、俺マコっちゃんを初めて見たときから、筋肉の付き方とかがボクサーっぽいなあって思ったから少し鍛えてやるうかと。」

【そんな理由でー！でも今強くなれば、もうパシリとかやらなくて済むかも　！】

「よーし、じゃあ強くなるためにやるよ。」

「そおこなくっちゃ！じゃあ早速サンドバックにパンチしてみてよ　」

雅は木にサンドバックを結び付けて、誠に指示した。

「よおし、とりゃあ！」

パフッ！

「お前駄目。」

「そんなああ、どうしよお。」

「まっ、こつさえ掴めば大丈夫だろ。」

「？」

「俺が手本見してやっからよく見とけよ！」

「あ うん。」

雅はサンドバックの前に恐い顔で立った。

「うおりゃああ！」

バコーン！！

サンドバックと木をへし折った。

「すい。」

「いやあ、今日は不調だなあ。」

「いや、あんた木折ってるよ！」

誠は思わず突っ込んだ。

「まっ、コツとしては、まず軸となる方の足で地面を思い切り蹴る。これがないと、威力が出ない。」

「なるほど」

「そして 蹴り以外に使うのは ここだ！」

「こ 腰？」

雅は微笑み、そして頷いた。

第五話：誠のパンチ（前書き）

- ・ 雅は誠を放課後に呼び出して特訓を行うとなんと……
- ・

第五話：誠のパンチ

「こ 腰？」

「そうだ、パンチするときに、腰を捻ってやると威力が増すんだ。」

「へえ、よおし、もう一度パンチしてみよ。」

誠はサンドバックの前に立ち、もう一度拳を突き出した。
すると

「バコーン！」

雅程では無いが、先ほどより勢いがついた。

【やはりこいつ】

「今のパンチどうだった？」

「あつ、ああ、さつきよりは全然マシだな。」

「よ 良かった。」

「あつ、俺用事思い出したから帰る。バイビー！」

雅は嵐のごとくその場から消え去った。

「一体何がしたかったんだ」

誠の疑問は増えるばかりだった。

翌日

この日は実力テストの日だ！

「てゆうか このクラス俺以外みんなサボリ!?」

そう、誠以外の生徒はめんどくさいためにサボリにはしつたのだ。

「さすがは不良だなあ」

誠は感心しながらテストを受けた。

【しかし一人でテスト受けると違和感が】

その時、教室に誰かが入ってきた。

「チーッス、遅れましたあ。」

「遅いぞ金子、まあ席座れ。」

担任の水野は一喝入れてからテストを配布した。

誠は金子の事を気かけながらも、テストを終わらせた。

「ふう〜、終わった。」

「あっ君は北出誠!」

「へっ？なんで俺の名前を」

「そりやお前、初日にあんな事件起こせば目立つのも当たり前だ、多分この学校で君を知らない人はいないよ。まあ俺はお前みたいなのやっ好きだぜ。」

【そんなばかなあ〜！しかも不良に気に入られてる〜！】

「と、とここで君の名前は？」

「俺か？俺は金子、金子洋。仲良くしようぜ！これ、メルアドだから。」

金子はメルアドが書いてある紙を誠に渡しその場を後にした。

「随分と不良っぽくない不良だなあ」

誠はそう悟った。

第六話・向井高校（前書き）

学校へ行く途中にとんでもないことに巻き込まれる！！！！

第六話：向井高校

誠は家の机の上で、金子洋にメールをうっていた。

何通かメールをしてみたが、どうやら金子は根は優しい少年だとい
うことが分かった。

【乱舞高校にもまともな人はいるんだな】

そう思いながら、誠は星空を眺めていた。

翌日

「やっべっ、遅刻じゃい、行ってきます」

誠はトーストを口にくわえ、家を飛び出した。

誠は一目散に走り、角を曲がった。

その時、何かにぶつかり、誠は吹き飛ばされた。

「いつてえ　　すみません。」

誠は謝り顔を上げると、体格のでかい、向井高校の制服を来た男が
いた。

ちなみに向井高校とは、乱舞高校のすぐ近くにある高校であり、何
かとお互いに因縁があるらしい。

「あはは、すいません、じゃあさようなら。」

誠は直ぐ様逃げた。

しかし、誠は袖口を引っ張られ前には進めない。

「待てよ、その制服　乱舞高校だな」

「そうだけど」

その瞬間、誠へ向けて拳を突き出してきた。

誠はそのまま殴られ吹き飛んで倒れた。

「ぐふっ、強い」

「てめえ、喧嘩慣れしてないな。まあいい。じゃあとどめといきますか。」

指をボキボキと鳴らして誠のもとへ向かって来る向井生。

誠は瞬時に危険を察したが、雅のあの言葉を思い出した。

『目をつぶるな、それじゃあ見えるもんも見えないぜ』

誠は立ち上がり、向井生に立ち向かった。

「くたばりな！」

唸るほどのパンチ、誠は目を離さずに見た。

【見える、見えるぞ！だけど 体が動かない！】

べつちやらべつって体が言うことを聞かないらしい。

【やられるー！】

誠は絶体絶命のふちに立たされた。

第七話・その名は林賢人（前書き）

誠は向井生に殴られそうになる、果たして!!!!!!

第七話：その名は林賢人

【だめだ、やられる！】

誠がそう思った時！！

「ぐはっ！」

急に向井生が倒れた。

「つてええええ！何？何が起きたの？」

「俺さ！」

誠は声が聞こえる方を見てみると、そこには金子洋がいた。

「てゆうかなんで金子君いるのおお！」

「あ？まあ あれだ。ここは俺の通学路だから。あと 金子君
じゃなくて洋でいいから。」

「じゃあ まあ洋、さっきどうやって向井生倒したの？」

「ああ、あれか？あれはなあ」

洋の会話が終わる前に横から向井生の拳が洋の頬をかすめた。

「ちっ、危ねえな、やる気みたいだな、おい向井生、名は何て言うんだ？」

「ふっ、名を名乗るときは自分からだろ？」

「ふっ、口の減らない野郎だな、まあいい、俺の名は金子洋だ。」

「私は林賢人、以後見知りおきを。」

「そおかい、じゃあバトル開始だ！　　と言いたいところだが、このままじゃ遅刻だ！行くぞまこっちゃん！」

「へっ？てかまこっちゃんって　　」

「じゃあなあ賢人、また今度やろうぜ！」

こうして二人はダッシュで学校に向かった。

「金子洋　　どこかで聞いたことがあると思ったが　　まさかな。」

林もそのまま学校に向かった。

学校

「何だと？向井生の林と会っただと？」

雅が真剣な顔をした。

「あ　　うん、どうしたの雅？」

「まこっちゃん　　そいつは　　俺の小学校の頃の同級生だ！」

誠に衝撃が走った。

第八話・雅VS洋（前書き）

遂にこの二人が対決することに！！

第八話：雅VS洋

「へっ？」

「だ・か・らあ、林賢人は俺の小学校の頃の同級生なんだよ。」

「えええええ！」

「まつ、そんなところだろうと思ったぜ！」

突然洋が割り込んできた。

「てめえ誰だ？」

「ああ、俺は誠の友達の金子洋だ！」

洋は誠と肩を組み、ニッコリと笑った。

「へええ、んでもよお」

雅は急に洋に殴りかかった。

しかし洋はそれを避ける。

「中々の運動神経じゃねえか。」

「そつちもおつかねえ拳持ってるな。」

洋はまたしてもニッコリと笑う。

「って二人ともやめてよ！」

「よく聞け誠、誠の友達ってんならある程度の腕がないと、この後起こる事件の足手まといになるだけだから今調べるんだよ！」

「事件？」

「まあ誠、お前は黙ってる。」

「ってケンカやめないのかよ！」

10分後

両者は傷だらけで倒れていた。

しかし雅がやや優勢と見える

「もう、だからケンカは止めてって言ったのに」

「強いな雅 流石は最強の小学校と呼ばれる天暦小学校出身。」

「知ってたのか。」

「ああ、お前は結構有名だからな。なんでも天暦小学校の入試テストのボクシング、トップで合格したんだろ？」

「ああ、そんな事もあったな。」

「実は俺も天暦小学校の入試を受けたんだ。」

「んで落ちたのか。」

「まあな、なんたって初戦は雅、お前だったからな。」

雅は驚いた顔をした。

「まっ、俺は一発でKO、天暦小学校へは入学出来なかった。」

「そうだったのか。」

「だから俺は雅、お前に会うために、俺の力を認めて貰うためにこの高校に入学した。」

「その成果がこれか。」

雅は洋のキズだらけの体を指差した。

「いや、殴り合いはまだ苦手だな。俺が真に得意とするのは
！今日向井生を倒したときの武器だ！見てくれ。」 誠

洋は机の上にそれを置いた。

第九話・洋の武器（前書き）

洋の武器とは！！

第九話：洋の武器

「これが俺の武器さ。」

洋はそういって、机の上にその武器を置いた。

「こ　これって、吹き矢？」

「そう、吹き矢。この矢に痺れ薬とか眠り薬とか入れて、相手に打つのだ。」

「あっもしかして今日の向井生が倒れたのって」

「そう、眠り薬を吹き矢で入れたからだよ。」

「そういう事か」

「おい、もし接近戦になったらどうするんだ？」

雅が質問した。

「ああ、接近戦になったら　まあその時はその時でパンチでも食らわせてやるよ！」

洋は笑いつた。

【こいつ　まだなんか隠してやがるな　】

雅はそう感じたが、またどうでも良くなった。

「まあ　洋。今後はお前の好きにしろ。」

「言われなくてもやるぜ。」

「けっ、いけすかねえやろうだ。」

雅は誠の買った牛乳の残りを飲み干し教室から出ていった。

「ああああ、俺の牛乳がああ！」

こうして洋は仲間になった。

一週間後

誠は学校生活にも慣れ、もはや不良の巣窟乱舞高校だと言うことを忘れていた。

「よし、みんな聞け。今日から一週間、うちの学校の大きな時計塔のなかにある、宝を探してもらう、これはみんなの親好を深めてもらうためのものだからな。そうだな　四人一組で行うからそのつもりで。」

担任の水野の言葉を誠を含む数人以外は聞いていなかったが、水野はその光景に慣れていた。

しかし

「あゝちなみにその宝は10万円相当だからな。」

その言葉に皆は食いついた。

「よっしゃあ、俺が取る！」

「いいや、俺だ！」

口々に皆は言う。

【まあ四人一組だから一人あたり25000円だな。】

水野は微笑を浮かべた。

第十話・決戦！宝探し〜仲間探し〜（前書き）

そこはかとなくなかまを探しました

第十話：決戦！宝探し〜仲間探し〜

「なあ誠お〜。」

誠が休み時間に日直日誌を書いていると、突如前から幽霊のごとく洋が顔を出した。

びっくりした誠はそのまま椅子ごと後ろに倒れた。

「いててて。」

誠は痛む腰を撫でて立ち上がった。

「大丈夫かよ？」

「う〜ん、まあ大丈夫。」

「それより宝探しの班どうするよ。俺、誠、雅であと一人。」

「う〜ん、そうだね　ねえ雅、どう思う？」

遠くにいた雅に大声で呼び掛けた。

すると雅は誠の元に不良っぽい歩き方で向かってきた。

【やっぱり雅怖！】

「誠が決めるよ。」

「えっ？俺？」

「ああ、俺が誰か誘ったって入学式のあの事件があったからみんな怯えて逃げちまうだろうしな。」

「なるほど」

「その点お前なら大丈夫だ！」

「それどういう意味だよ！」

「てことでじゃあな。」

雅はそのまま何処かへ行ってしまった。

「ちえっ、じゃあねーなあ。」

「まあ俺も一緒に探すの手伝うからさ」

「さすが心の友よ！」

誠は洋に抱きついた。

「こら、気持ち悪いから離れるよ。」

「よし、じゃあ気を取り直して仲間探し開始だ！」

「おー！」

しかしクラスのみんなは次々とグループを作っていた。

そして

「あっ？同じグループになって欲しいだ？」

そう小杉と組むしか無くなったのだった。

「まあ俺がチームに入れば宝なんて一発で見つかるから見てるよ！」

「うるさい！」

雅が一発蹴りを入れて気絶させた。

「こんなんでこのグループやってけるのかなあ」

今決戦が始まる！

第十一話：決戦！宝探し〜始まり〜（前書き）

遂に始まった宝探し・・・・・・・・・・・・・・・・始めに待ち受けるものは。。。。

第十一話：決戦！宝探し〜始まり〜

四人は例の時計塔の前にいた。

「よっしゃあ、いつちよやっちやるけん！」

「お〜！」

四人は中に入るとソコは暗闇で何も見えなかった。

「やべっ、何も見えねえじゃん！」

「あつ！こんな時のために懐中電灯持ってきたんだよね。」

誠はそう言って、鞆の中から取り出した。

「さっすがマコっちゃん！頼りになるぜ！」

「しかしこの時計塔、色々和不気味だなあ」

小杉はそういつと壁に寄りかかった。

すると

「うわああああー！」

なんと小杉の寄りかかった壁が抜けたのだ。

しかもその先は滑り台で地下へと続いているみたいだ。

「小杉！よし俺らも行くぞ！」

「よし！探検だ。」

「ったく世話のやけるやつだ。」

雅はしぶしぶ了承した。

そして誠、洋、雅の順で滑り台を滑っていった。

そして滑り終わると、そこはさらに暗がりか広がった洞窟だった。

「よし着いた。それにしても暗いなあ　　おゝい小杉どこだあ？」

「ここだよお」

「えっ？どどこ？」

「下だよお。」

「あつ！わりいわりい、暗くて気付かなかった。」

誠は小杉の上に乗っかっていたのだ。

「じゃあ全速前進！」

「おゝ！」

第十二話・決戦！宝探し〜フリダシに戻る〜（前書き）

宝を探すが地下深くまで落ちてしまった四人に打つ手は無い！？

第十二話：決戦！宝探し〜フリダシに戻る〜

「さあ！気を取り直して探検だあ！」

相変わらず洋は元気だ。

「こんな状況じゃ探検する気失せるよ」

誠は意気消沈している。

そう、ここはどこかも分からない地下の世界。

誠を始めとする四人はどのようにしてこの試練を乗りきるのか！！

歩くこと2時間、誠は一閃の光が射し込むところを見つけた。

「あの光　きっとゴールだあ！」

誠と小杉が汗だらだらで発狂する。

「よっしゃあみんな行こうぜ！」

四人は走った。

光の射す方へ。

そして

「つてえええ！」

そこは学校　ではなく駅前商店街だった。

「なんだよ　何も無いじゃん」

「がっかりだよ！」

「まあ　とりあえず学校戻るか」

こうして四人はとりあえず学校に向かった。

教室に戻ると、未だに宝探しをしているせいか、ほとんど生徒がいなかった。

「んにしても、何処に宝があるんだろう」

「こういうのはまた始めから考え直した方がいい。」

「大体賞金10万つてのが話がうますぎるもんな」

結局四人は何も分からぬまま家路についた。

残り6日

誠が登校していると、雅と一緒に図書館へ行こうと言ったので行ってみた。

「ここに何か宝の在処のヒントが隠されてるかも知れない。」

「そんな都合よく見つかるかなあ」

「まあとりあえず探そうぜ！」

誠は渋々手伝った。

探してみると、学校の歴史などが記してある本などがたくさんあった。

「へえ、この学校の図書館色々あるなあ。」

「確かに　ん？なんだこの本？」

雅は棚の一番上にあつたホコリを被つた本を手にとつた。

そして雅はホコリを手で拭き取るとこんな題名の本だった。

『宝の地図』

第十三話：決戦！宝探し〜謎解き〜

「こ　これは　」

雅が宝の地図を開くとそこにはこう書かれていた。

『宝、長きものと短きもの天空に向かい交わりし時、鳳凰それをくわえる。』

「なんじゃこりゃ　」

「さ　さあ　てか地図ですらねえ　」

「とりあえず洋に相談するか。」

二人はそういって洋の元へ行った。

「う〜〜む」

洋は腕を組んで悩んだ。

「どうだ、分かるか？」

雅がはやしたてる。

「あっ！」

「分かったのか？」

「分からない。」

「って紛らわしい反応するなよ！」

二人は声を揃えて言った。

「しかしこれを解かないことにはなあ。」

「俺が誰か脅してとかせるてか！」

雅が俺って天才みたいな顔をしながら言った。

「それは駄目！」

誠と洋が声を揃えて言った。

「くそ、どうすればいいんだ」

誠が地図(?)を片手に歩いていると

「うわっ！」

誠はバナナの皮に滑った。

そして地図は誠の手を離れ遠くにいる生徒の一人の方に弧を描きながら飛んでいった。

「やばい、地図の存在が他のやつにバレる！」

雅が発狂し、その生徒の方へ向かい猛突進した。

「だめだ、雅じゃ間に合わない！」

「どいてな誠、俺の吹き矢で。」

洋は猛スピードで吹き矢を射った。

ターゲットは　そこにいる生徒だ！

そして命中！

「ってなんで人に吹き矢射ってるの！」

「ああ、あれ眠り薬で眠ってるだけだから。」

「あああっ！」

雅がまたしても発狂した。

「どうした？」

「こいつ　小杉じゃん！」

三人は沈黙した。

第十四話：決戦！宝探し〜見つけた！〜（前書き）

ついに宝の在処を見つけ出した雅チーム。このまま優勝するのか？

第十四話：決戦！宝探し〜見つけた！〜

宝探し残り5日

「おはよ！小杉、暗号解けた？」

「こんなの簡単だろ。」

小杉は解いた暗号を純に渡した。

実は前日に小杉の意識が戻った時に暗号を託しておいたのだ。

「そうか　なんで気がつかなかったんだろ。」

「ってことで宝の半分は俺が頂　」

「すっこんでろ。」

雅の蹴りが小杉の腹に命中！

「ってまた雅は　」

「けっ、そんなことより宝だ！」

「そうだな！」

一行（小杉を除く）は時計塔へと向かった。

「でもどうやってあそこまで行くんだ？」

「やっぱり よじ登るしか無いんじゃない？」

「かーっ、めんどくさ。」

「しかも今はまだ午前9時だし」

「小杉が言ってた12時まで待つか。」

12時 それは正しく『長きものと短きもの天空に交わりし時』である。

こうして誠は授業、残りの二人はカツアゲで時間を稼いだ。

そして

12時だ！

その時、時計の上にある扉から鳥の人形が時間を知らせるために出てきた。

『クルッポー！』

「あれが鳳凰 なんか マヌケだな。」

「まあサツサと宝取って賞金頂こうぜ。」

そういつて洋がロープを取り出して、カウボーイの如く投げた。

しかし

『ドガンー!』

「な 何今のー!」

「あつ、あいつらは!」

洋が指差した方にはなんと、1年2組のボスらしき相手がいた。

【こ こいつやべえ。】

雅が経験的にそう悟った。

「宝は渡さねえ。俺も金が欲しい。」

そういうとその男は爆弾を雅に投げた。

しかし雅は間一髪で避けた。

『ドガンー!』

その爆風で雅の髪が揺れる。

「不意討ちとかちょっとムカついたわ。本気出しちゃって良いですか?」

雅の怒りに誠は足がすくんだ。

第十五話：決戦！宝探しくバトル

「おいてめえ！俺は一組の結城雅だ。お前の名前はなんだ！」

「俺は二組の甲斐健吾」

そういうと健吾はまた爆弾を投げてきた。

「ちっ、しっけーな。」

雅が華麗なステップで避ける。

そして一気に健吾との差をつめた。

「行けるぞ雅！」

洋が叫ぶ。

「うおりゃー！」

雅が大きく拳を振り、健吾の顔面めがけそれを放った。

しかしその時健吾の口元がにやついた。

その瞬間誠は何かを感じた。

「雅、行っちゃダメだ！」

健吾の危険を察知したのか、そう叫んだ。

「遅い！」

健吾が口を開き、向かってきた雅の拳を片手で止め、さらに遠くへ吹き飛ばした。

『ズドーン！』

雅は地面に体を叩きつけられた。

洋が危険を察し構える。

しかし

「別にそう構えなさんなつて。ただ俺は宝が欲しいだけなんだつて。」

健吾が宝を指差した。

しかし

「あれ？宝が無いぞ。」

「そうか！今の戦いで時間が過ぎて、鳳凰が元の場所に戻ったんだ！」

「ふふふ　まあいいさ。まだ5日　そう、昼夜合わせてチャンスは8回ある。まっ、宝を横取りしたいってんなら俺と毎回戦うことだな、ハハハ、あばよ。」

そう言つて健吾は去つていった。

「行つちやつた　　そうだ、雅！」

誠が雅に駆け寄つた。

【あんなコテンパンにやられちゃつて、悔しいだらうなあ。】

「雅、大丈夫？」

「特訓だ！」

「へ？」

「だから、今夜に備えて特訓だつて！」

【雅、お前つてやつは！】

「もー、しょうがないな、雅の負けず嫌いには敵わないや。」

「よし俺も協力する、俺のホントの力も見せてやるよ！」

洋が自慢げに言った。

「みんな　　」

「てか洋の力気になるわあ！」

こうして特訓が始まつた。

第十六話：決戦！宝探し〜新たな境地〜（前書き）

ついに新技を引っ提げて登場した雅。どんな技が繰り出されるか！

第十六話：決戦！宝探し〜新たなる境地〜

宝探しまであと4日

今がちょうど夜の12時、約束の時間だ！

「ふん、懲りずにまた来たな。」

健吾が挑発するように言う。

「ふふふふ。」

雅が微笑む。

「何がおかしい！」

「俺はこの12時間で生まれ変わったんだ。あまりなめないほうが身のためだぜ。」

【つつてもあの技はまだ未完成だけだな。】

「ほほう、ではお前のその成果とやらを見せてもらおう！」

そついうと健吾は雅の方へ猛スピードで駆け寄った。

健吾の拳がうねりをあげる。

【洋、お前が教えてくれたあの技、試してみるぜ！】

11時間前

「雅にはスピードがあるんだよなあ。」

「スピード？俺50m走そんな速くないぞ。」

「そっちの速さじゃなくて　パンチの速さだよ。」

「ああ、そっちか。でもそれがどうしたんだ？」

「うん。健吾とやった時、お前は攻撃を受けっぱなしだった。そして反撃出来なかった。」

「ああ、あいつは一度攻撃を始めると隙が無くなるんだ。」

「じゃあ攻撃を受けないためにはどうすればいいと思う？」

「そりゃ避けるか先にこっちが攻撃するか」

「そう、ようはお前の持ち前のパンチの速さで先手必勝ってやつよ。」

「でも攻撃したってすぐに相手からの攻撃がくるし」

「じゃあ攻撃をさせなきゃいいんだよ。」

雅と誠は驚いた。

【洋、お前の言ってたあれ、やってみるぜ！】

雅は向かってくる健吾に向かいある構えをした。

「いけ！雅！」

「行くぜ！」

第十七話：決戦！宝探し、爆発（前書き）

ついに本領発揮？雅の新必殺技は

次週にお預けだあああ！！

第十七話：決戦！宝探し爆発

「行くぜ」

雅が突如変なステップを踏み出し始めた。

「なんの真似だか知らないが、俺には勝てないぜ。」

健吾は前回同様に片手で雅を吹き飛ばした。

『ズドーン！』

「雅ー！」

誠が雅の方へ駆け寄りうとする。

「行くな誠、これじゃああいつの為にならねえ。」

「でも 仲間を見捨てるのはもつと駄目だよ！」

誠が洋に向かって初めて怒鳴った。

「 そうだな、悪かった だけど雅には雅の考えがあるんだ、少し待ってくれ。」

誠を説得するように洋が言った。

「ハハハ、次は誰が相手してくれるんだ？」

健吾が挑発する。

「まだ俺はやれるぜ！」

雅が傷だらけで立ち上がった。

「ふん、お前みたいな弱いやつに用は無いだよ！」

健吾が雅に拳を振り上げる。

【終わった】

誠がそう思った瞬間

『ズドーン！』

「えっ？嘘！」

誠の目に映ったのは、雅が健吾に一発入れた光景だった！

「へっ、攻撃さえ当たればこっちのもんだよ！」

健吾はその場で倒れた。

「やっと倒した さてと、宝は」

雅が時計塔を見上げると、もうそこには宝がない。

「そんなバカな！」

「俺だよ、俺」

そう、洋が予め宝を取っておいたのだ。

「なんだよお、脅かすなよお。」

「わりいわりい。」

「ところで、雅はどうやって健吾を倒したの？」

誠が何も分からぬまま質問した。

「それはなあ、この技さ！」

雅は誠に真相を告げた。

第十八話：決戦！宝探し〜終結〜（前書き）

ついに宝探しは終結へ

そして雅は

第十八話：決戦！宝探し〜終結〜

「内部破壊？」

誠は雅の発言に少々驚きを隠せなかった。

「そうだけ、指をこんな具合に立てて相手のおでこに突きつけるんだ。」

「そんなんで内部破壊出来るのー！」

「これは雅の俊敏な腕だからこそ出来るんだ。」

洋は言った。

「ところで洋さんよお、この技が完成した暁にはあの事を話してくれるって言ったよなあ？」

「分かった」

急に二人の間に深刻な空気が流れた。

「どうしたの？二人とも」

「実はこの技、俺が雅に教えたって言うより、ある方に頼まれて雅に教えるように言われたんだ」

「えっ？そうなの？誰が洋に頼んだの？」

「話せば長くなるが　この技の伝承を頼んだ御方は、何を隠そうお前の親父さんなんだ。」

「やっぱりな。」

雅は洋が思ったよりも落ち着きを払った反応をした。

「雅、なんでそんなに落ち着いてられんだ、お前は　お前は小さい頃に生き別れした親父に会いたくないのか？」

洋のいきなりの言葉に雅は少し反応したが

「そんなこと言われたって俺は親父の顔は覚えてねえし　。んで、なんで洋は親父と知り合いなんだ？」

「それはまだ言わねえ、お前が親父さんの伝承する技をマスターするまではな！」

洋の目は本気だった。

「ケッ」

雅は少し不満そうだった。

こうして宝探しは幕を降ろした　　が

小杉が雅に腹を蹴られて入院してることなど、誰も知る由も無かった。

第十九話：仕組まれた合コン（前書き）

ついに誠が楽しみにしていた合コンが！
はたして何が起ころのか！

第十九話：仕組まれた合コン

「誠〜！」

「どうしたの洋？」

「ついにやったんだよ」

「何を？」

「実は 合コンすることになったんだ！」

「へえそう つてえええええ！」

第十九話：仕組まれた合コン

「んでさあ誠、合コン一緒に来てくれないかなあ」

「えっ？一緒に行ってもいいの？」

誠の心が弾む。

「もちろん！まだ参加者が俺と誠しかいないからなあ。」

「そうなんだ、そういえば女の子達は可愛い子達なのか？」

「もちろんさ！あの有名女子高の最高に可愛い子ちゃん達を選びす

ぐりで提供してくぜ！」

「ううう、考えただけで心踊るぜ！」

「じゃあ次の日曜、一時に〇〇の前で！」

「ラジャア！」

こうして誠の初合コンとも言えるべき戦いは幕を開けた。

日曜日

誠が一番乗りで待ち合わせ場所に着いた。

「みんな早く来ないかなあ」

待つこと30分、三人の女の子がやってきた。

女の子は誠の顔を知っていたらしくすぐに近寄ってきた。

「あつ、誠くんだねえー！今日はヨロシク。」

「あつ、うんよろしくー！」

【くうく、女の子と会話した！】

「それにしても洋遅いなあ」

すると誠の携帯が鳴り出した。

誠がメールを見ると

【はっ？ドタキャン？】

ということだ

誠と女の子三人だけが集まった。

「ええ、洋君こないのお」

「ガツクシ」

誠が動揺する。

すると

「おっ、君たち可愛いねえ、僕達とお茶しない？」

ナンパ野郎が現れた！

「きゃあー！誠くん助けてえ〜！」

どうする誠！？

第二十話：立ち向かえ（前書き）

ナンパ集団に追われる女の子と誠、いったいどうなっちゃったの？？

第二十話：立ち向かえ

誠達の前にナンパ野郎が現れた。

「ねえねえ、お茶しようよお」

「きゃー、誠君助けてえー」

「と とりあえず逃げろー」

みんなは一斉に逃げた。

「逃がすかよ！」

ナンパ集団も追いかける。

【あわわわわ、なんでこんな目にあつのお〜】
すると、

「きゃっ！」

女の子の一人が転んだ。

ナンパ集団が女の子に迫る。

「助けてー！」

「よし、かかれえー」

誠は思った。

自分が傷つくのは嫌だ、けど他人が傷つくのは もっと嫌だと。

誠はナンパ集団の手を掴んだ。

「な　なんだてめえ　」

「この子は嫌がつてるだろ？」

「は？うるせえなあ、男は失せてな！」

拳を誠に向かい放つ。

しかし誠はそれを見切った。

「遅いよ。」

「は　速い！」

「みんな、今のうちに逃げて！」

誠は今のうちに女の子達に逃げるように指示した。

「どうかご無事で」

誠はホッとした。

しかし

ゴン！

誠は鈍器で頭を殴られ血を流した。

「よくも俺の獲物を邪魔したな、この借りは倍にして返すぜ！」

「そうかい」

【くっ、頭が　もう駄目だ】

「じゃあな坊や、よいこはおねんねしてな！」

ナンパ集団が鈍器で頭を殴ろうとする。

【もう駄目　だ】

誠は何もかも諦めた

しかし

「ぐわあ！誰だてめえ！」

「え？」

誠が顔を上げると。

「そんなみつともねえ面、乱舞高校の生徒がするもんじゃないぜ！」

「あなたは」

向井高校 林賢人

「よお、会つのは二回目だな」(6話参照)

「助かったよ。」

「んで、俺はこいつらを倒せばいいんだな？」

ぽきぽき指をならす林、いざ戦闘開始！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770d/>

Bloom All Over

2010年11月24日05時44分発行